



青年国際交流 2019 International Youth Exchange

「世界を見に行ったら、自分を見つけた」



内閣府青年国際交流担当室



一步踏み出せば、人生はもっと豊かになる



内閣府青年国際交流事業は、国際社会・地域社会で活躍する次世代のリーダーを育成することを目的とし、国際的課題についてのディスカッション能力の向上や、国際社会での実践力の向上を図る、青年人材育成プログラムです。

内閣府が実施する6つの青年国際交流事業



「東南アジア青年の船」事業
「世界青年の船」事業
国際社会青年育成事業
日本・中国青年親善交流事業
日本・韓国青年親善交流事業
地域課題対応人材育成事業 「地域コアリーダープログラム」



事業に参加すると、こんなことが身に付きます！

■ 異文化理解能力

文化の「違い」と、逃げ場のない環境に悩み苦しんでいた時、笑顔で声を掛けてくれたのは相部屋の外国参加青年でした。

⇒大江章太さん（2017年度「東南アジア青年の船」事業参加者）の感想はP.4へ



ホームステイを受け入れてくれた中国人家族とは、言葉の壁を越えてお互いに理解を深め合うことができました。

⇒飯塚真央さん（2017年度日本・中国青年親善交流事業参加者）の感想はP.10へ



■ 日本の良さを対外的に発信する能力

船内の自主活動で武道会や百人一首勉強会を企画。

自分から日本文化の発信ができたことは大きな自信になりました。

⇒中塚千和さん（2017年度「世界青年の船」事業参加者）の感想はP.6へ



■ 国内外の青年とのネットワーク

最も大切な出会いは一緒にミャンマーに行ったメンバーとの出会い。人との出会いは自らの行動を変える力があります。

⇒宮澤俊太朗さん（2017年度国際青年育成交流事業参加者）の感想はP.8へ



ディスカッションや文化交流を通して築いた韓国青年との友情。派遣が終了した後も連絡を取り合っています。

⇒木村朝香さん（2017年度日本・韓国青年親善交流事業参加者）の感想はP.12へ



■ 専門知識

派遣先で知った、「ユースワーカー」と呼ばれる若者の支援に携わる人々の存在。帰国後、自身も「ユースワーカー」の意識を持ち、動き始めています。

⇒高畠靖明さん（2018年度地域コアリーダープログラム参加者）の感想はP.14へ





船内で各国政府代表会議の模擬練習をする参加青年たち（「国際関係（日・ASEAN協力）」グループ）



安田蒲鉾でかまばこ作り体験（地方プログラム、福井県）



課題別視察先のKrousar Thmeyにて現地青年と点字で交流（「質の高い教育」グループ、カンボジア）

■参加青年の感想

私にとって「東南アジア青年の船」事業は、日本と ASEAN の青年たちが船上でつくる2か月間の小さな社会でした。その社会の中には、性別や年齢はもちろん、文化や宗教が異なる多種多様な人がいて、様々なプログラムを自分たち自身で運営していました。そのため私たちは、議論をし、時にぶつかり合いながら 一つのよりよい結果を生み出していました。

その船上の社会の中で、私は日本では感じことさえしなかった多くの「違い」に直面し、違和感や戸惑いを覚えました。その「違い」とは、文化の違いであり、規則や時間、コミュニケーションに対しての考え方が日本とは異なっていました。通常の社会であれば、そのストレスから解放するために、別の場所に移動したり、インターネットの世界に浸ってみたりすることができますが、この船上の社会の中では、逃げることができません。私は、逃げることを考える弱い自分と向き合うことと、「違い」の対象である外国参加青年と対峙することを強いられました。しかし、悩み苦しんでいる私に笑顔で声を掛けてくれ、常に様子を伺ってくれたのが、まさに相部屋の外国参加青年でした。寝食を共にし、会話を交わすうちに、お互いの価値観や多様性を認め合うことができるようになりました。それ以降、船上の社会生活は、新しい学びにあふれ、大きな刺激となりました。私は、今まで目を背けていた「違い」に向き合うことで、これまでの自分のモノサシなどちっぽけなものだ、ということを外国参加青年から学びました。

現在私は、会社員として働いています。社内では、確かに、築き上げてきたものには安心感や利便性がありますが、一方で、それだけでは成長に限界があることをこの事業から学びました。そこで私は、社内の中で私自身が「違い」になることで、会社の成長に良い刺激をもたらしたいと考えています。そのためにも、私は今後も様々な経験と多くの出会いを大切にし、変化を楽しみたいと考えています。



大江 章太（2017年度参加）

「東南アジア青年の船」事業

Ship for Southeast Asian and Japanese Youth Program (SSEAYP)

「東南アジア青年の船」事業は、1974年のインドネシア、マレーシア、フィリピン、シンガポール、タイ各国（当時のASEAN5か国）との首脳会談による共同声明に基づき、ASEANと日本による青年国際交流の共同事業として開始したものです。1995年からブルネイ、1996年からベトナム、1998年からラオス、ミャンマー、2000年からカンボジアが参加し、これらASEAN各の協力のもとで、日本政府が実施しています。

ASEAN10か国の青年と船内で共同生活をしながら、ディスカッションや文化交流を行います。

東南アジア各国から選び抜かれた青年とのネットワークを構築するとともに、アジア地域の未来を担う人材の育成を図ります。

[事業概要]

活動内容：ディスカッション活動、各国紹介、委員会活動、参加者による自主企画活動、表敬訪問、ホームステイ、課題別視察等

ディスカッションテーマ：①グローバル化の功罪 ②情報とメディア ③国際関係（日・ASEAN協力）
④長寿社会を生きる ⑤質の高い教育 ⑥レジリエントで持続可能な都市づくり
⑦ソフト・パワーと青年の民間外交
⑧手頃で信頼でき持続可能なエネルギーの利用

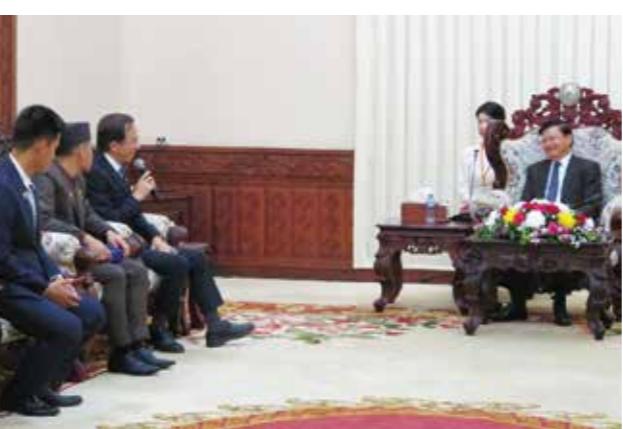
※2018年度の例

参加国：ブルネイ、カンボジア、インドネシア、ラオス、マレーシア、ミャンマー、フィリピン、シンガポール、タイ、ベトナムと日本

参加青年数：日本参加青年40名程度、外国参加青年10か国280名程度

訪問国：ASEAN諸国4か国程度

運航期間：11月～12月頃（40日間程度）



H.E. Mr. Thongloun Sisoulith ラオス人民民主共和国首相表敬訪問（ラオス）



船内のグループ対抗レクリエーション



船内でコースを通して変化した自身の防災意識についてスピーチする参加青年たち（「防災活動のための人材育成」コース）

「世界青年の船」事業 Ship for World Youth Program (SWY)

1967年度開始の「明治百年事業」にルーツがある事業で、国際化や多様化が進展する社会でリーダーシップを発揮して、社会貢献を行うことができる青年を育成することを目的に実施しています。リーダーシップや異文化理解を、理論・実践の両面で強化することに重点を置いています。

毎年異なる世界10か国から集まる外国青年と、約1週間の陸上研修と約1か月間の船上研修（訪問国活動を含む）に参加し、共同生活をしながら、ディスカッションや交流活動を行います。

[事業概要]

活動内容： コース・ディスカッション、セミナー、各国紹介、委員会活動、参加青年による自主企画活動、スポーツ・レクリエーション、表敬訪問、課題別視察等

ディスカッションテーマ：①平和な世界をつくるための教育

- ②お互いを高め合う実践型エンパワメント
 - ③グローバル・シティズンシップ ④グローバル・ヘルス ⑤国際協力
 - ⑥情報とメディア ⑦ソフトパワーと青年外交
- ※2018年度の例

参加国：

オーストラリア、チリ、エクアドル、ギリシャ、ソロモン諸島、スウェーデン、
タンザニア、トルコ、アラブ首長国連邦、バヌアツ、日本

※2018年度の例

参加青年数：

日本青年120名程度、外国青年10か国120名程度
沖縄（日本）、ダーウィン、ブリスベン（オーストラリア）

※2018年度の例

寄港地：

1月～3月頃（35日間程度）



日本参加青年の自主企画によるブロックチェーンに関するセミナー



女性の活躍を支援する自助グループSHG クドゥム パシュリの女性専用ジムを訪問（訪問国活動、インド）

■参加青年の感想



中塚 千和
(2017 年度参加)

船上研修では**学問的な学びと文化的な学び**がありました。初めに学問的な学びの部分では、各セミナーやコース・ディスカッションが挙げられます。私は「ダイバーシティ推進とインクルーシブ社会の実現」コースに所属し、全ての人がいるままに受け入れられ、多様性が尊重され生きやすい社会をつくるためのディスカッションを行いました。男女格差や性の多様性、障がいや人種などの多岐にわたるトピックを扱いました。各セッション後に時間が足りず、その後夕飯を共にしながら議論を続けたり、語り合っているといつの間にか輪が広がり、仲間と夜遅くまで話し込んだことは忘れられない思い出になりました。国や文化を超えて議論をする時必ず意識しなければならないことは、相手を尊重し、むやみに否定しないことだと思います。ある国では当たり前のこと、ある国では犯罪になる場合もあります。相手と自分の国について学び、そして相手の意見を尊重しつつも、よりよい社会を目指すために自分の意見を持つことの大切さを学びました。

また、文化的な学びの部分では、各国の文化、歴史、社会問題等を発表し合う**ナショナルプレゼンテーションや自主活動での勉強会、また、日常生活から各国の文化を学ぶ**ことができました。特に寄港地のインドとスリランカでは、現地の学生とのディスカッションや文化交流を通して、**自分の五感全てで異文化を感じる**貴重な経験をすることができました。更に船上で他の参加者と協力して企画した武道会や百人一首勉強会などを通じて、自分から日本文化の発信ができたことは大きな自信になりました。

この企画に日本・外国参加青年問わず多くの方が興味を示し、積極的に参加してくれたことは忘れない思い出になりました。

船という空間は、仲間から多くを学ぶことができると同時に、一人一人がかけがえのない個性を存分に発揮することで自分自身をより深く理解できる場所だと感じました。船での生活で培った異文化理解力、そして「自分たちが各分野で社会をより良くするんだ。」というモチベーションを忘れず、世界中にいる既参加青年たちとのネットワークを活用しながら、自分が今後携わる分野でもこの経験を発信し、学び続けていきたいです。



マイトリーパーラ・シリセーナ スリランカ大統領を表敬訪問する（訪問国活動、スリランカ）